

ズワイガニオホーツク海南部 研究機関会議結果

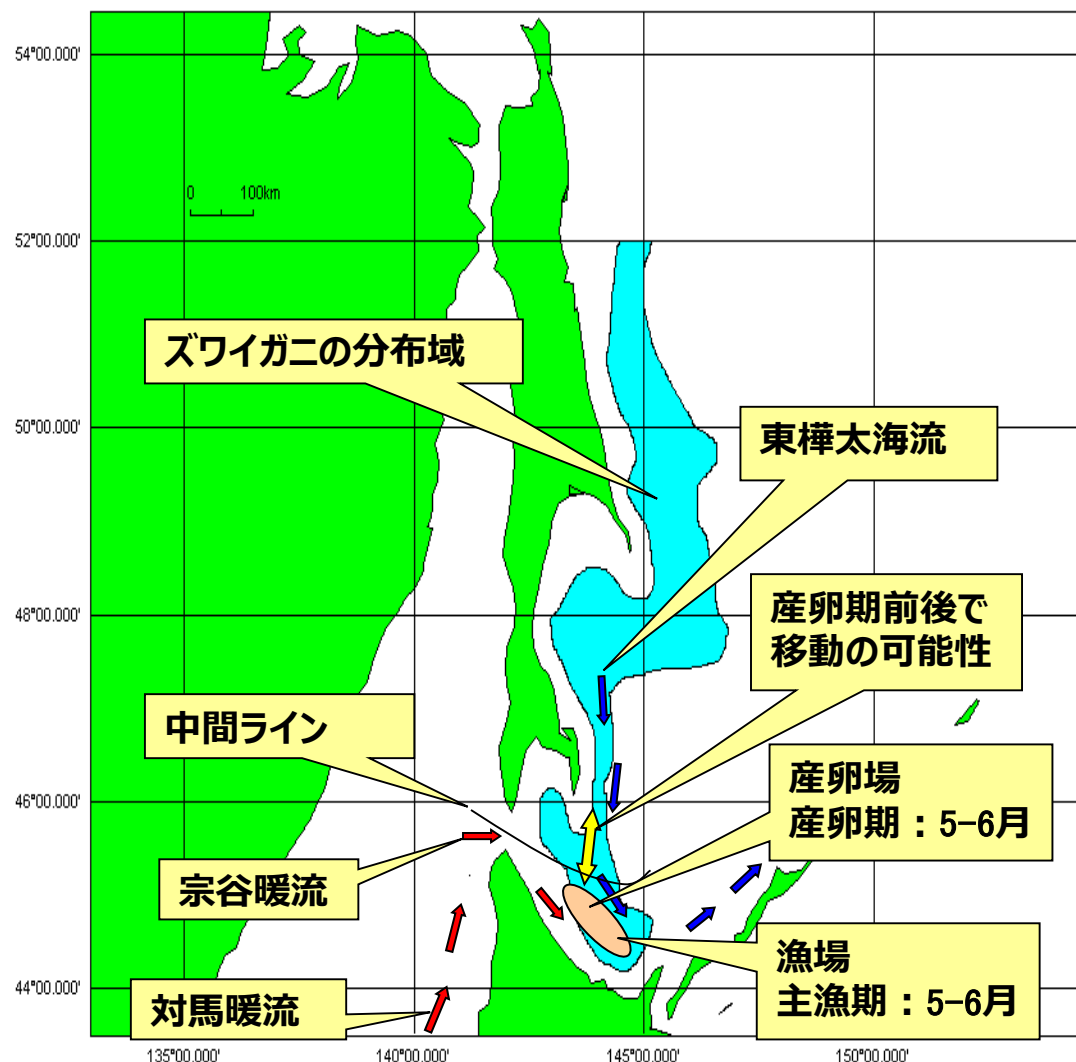


国立研究開発法人 水産研究・教育機構

内容

1. **ズワイガニオホーツク海南部の令和2年度資源評価結果**
2. **資源管理目標等を導入した「新たな資源評価」について**
3. **ズワイガニオホーツク海南部の漁獲管理規則等の提案について**

ズワイガニオホーツク海南部の分布・回遊状況



分布海域

- 北海道オホーツク海側～サハリン東岸の大陸棚および大陸斜面上に連続的に分布
- 分布水深は100～300 m

産卵場（日本水域）

- 北見大和堆北西部の水深150～200 mの海域、その他の産卵場については不明
- 産卵期は5～6月

移動・回遊

- 日本水域とロシア水域の間で季節移動している可能性が高いが詳細は不明

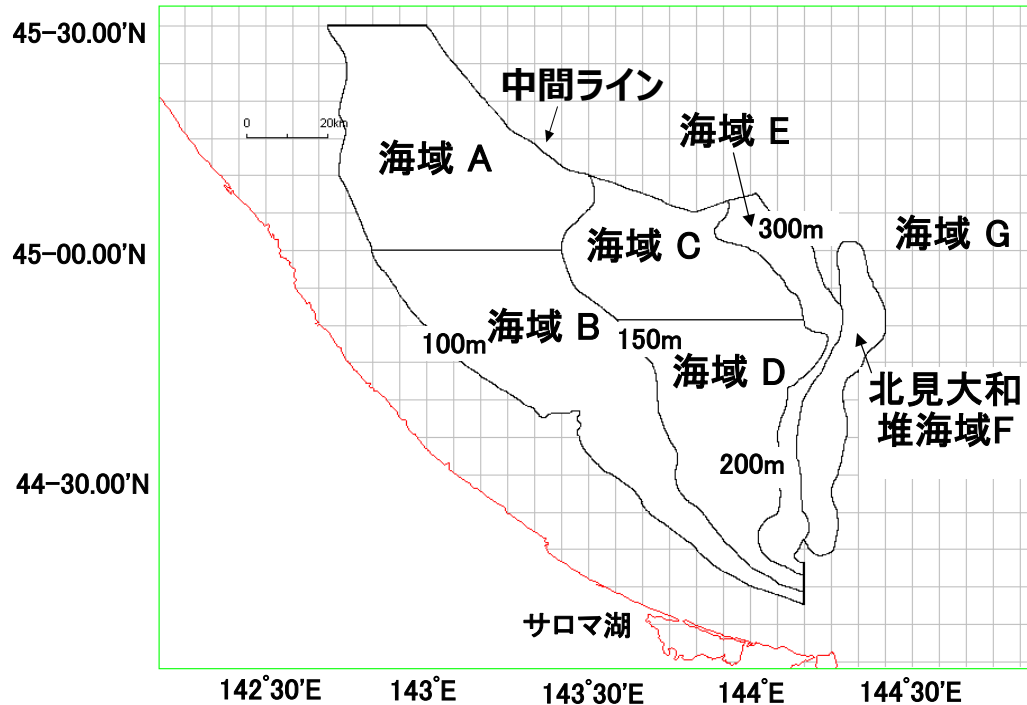
漁獲量の推移



漁期
7月～翌年6月

- 漁獲量の大部分は、沖底（オッターロール）による。
- 漁獲量の増減は、スケトウダラの漁獲状況や、ズワイガニの単価の影響を受ける。
- 漁獲量は、1992年に5,428トンに達したが、その後急激に減少。2011年漁期には60トンとなったが、2015、2016年に905、885トンに回復し、2018年も804トンとなったが、2019年は237トンに減少した。
- 2015～2018年は、ズワイガニ狙いの操業が増えたこと等により、漁獲量が多かったと考えられる（2007～2012年はスケトウダラが豊漁であった）。

資源量指標値について



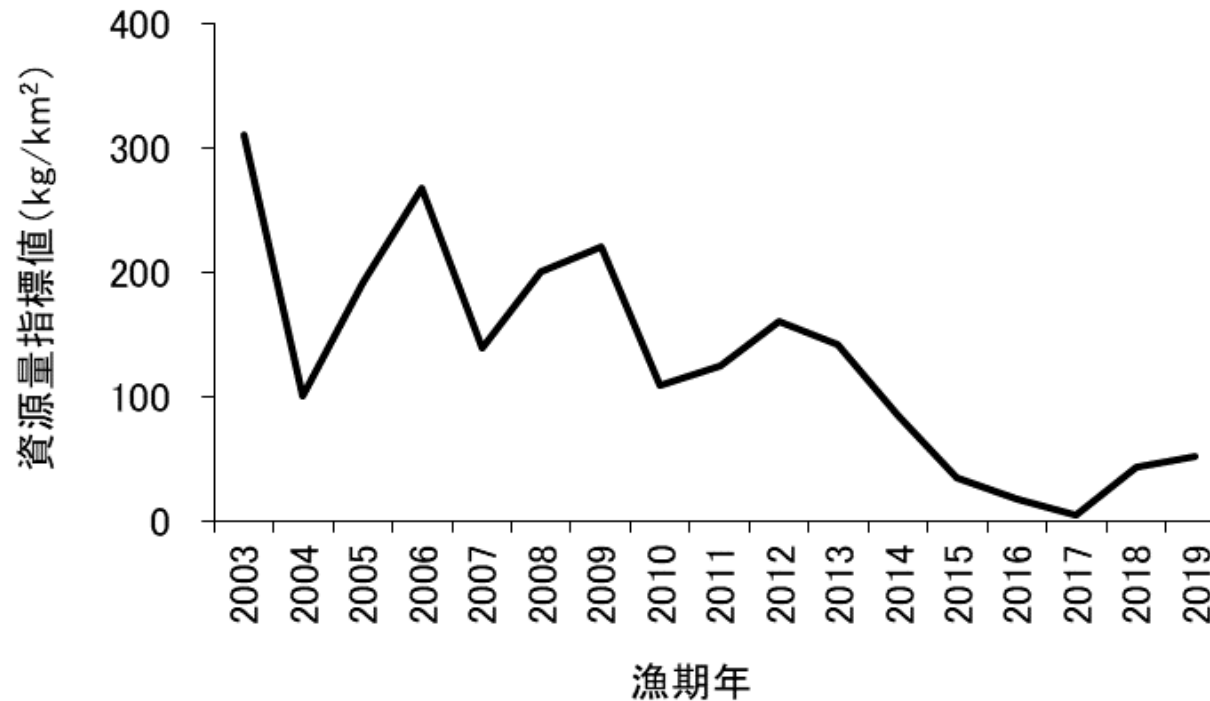
目的：

- ズワイガニ等の重要底魚類の分布状況を把握する
- ズワイガニの季節移動を推定するための情報収集
- **日本水域の分布密度を推定し資源量の指標値として用いる**

トロール調査の調査海域

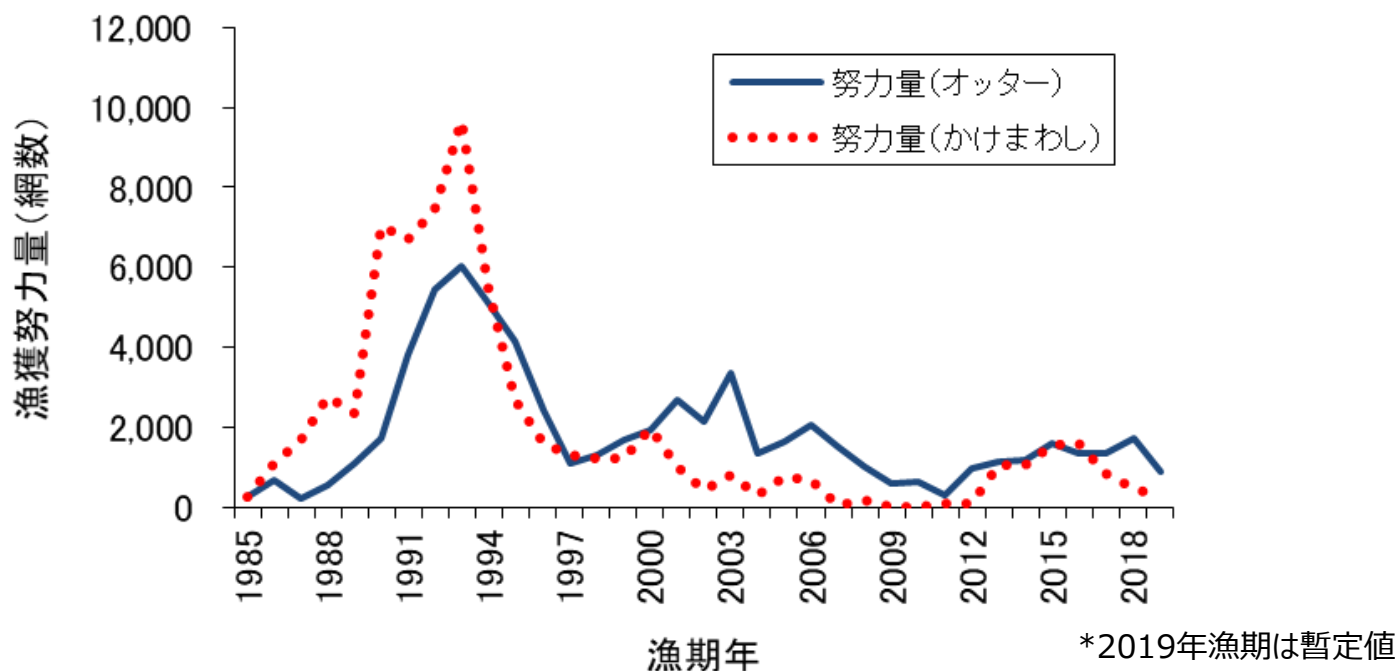
ズワイガニの分布域である海域A～海域Eの5ブロックについて分布密度を算出

資源量指標値の推移



- 資源量指標値には漁獲対象である甲幅90mm以上の雄の分布密度 (kg/km²) を用いる。
- 資源量指標値は2003年の310 kg/km²から増減を繰り返しながら減少を続け、2017年には5 kg/km²となったが、2018年には43 kg/km²へと増加し、2019年も52kg/km²に増加した。

漁獲努力量の推移



- 漁獲努力量（ズワイガニ有漁網数）は、沖底「オッターロール」、「かけまわし」とも1993年に最多となり、オッターロールで6,033網、かけまわしで9,667網に達したが、その後減少し、2011年にはオッターロールで291網、かけまわしで90網となった。
- 2015年以降は増加傾向となったが、2019年はオッターロールで901網、かけまわしで274網で前年より減少した。
- 漁獲努力量の変動は大きいですが、これはズワイガニに対する狙いの強度が変化することも原因とされる。

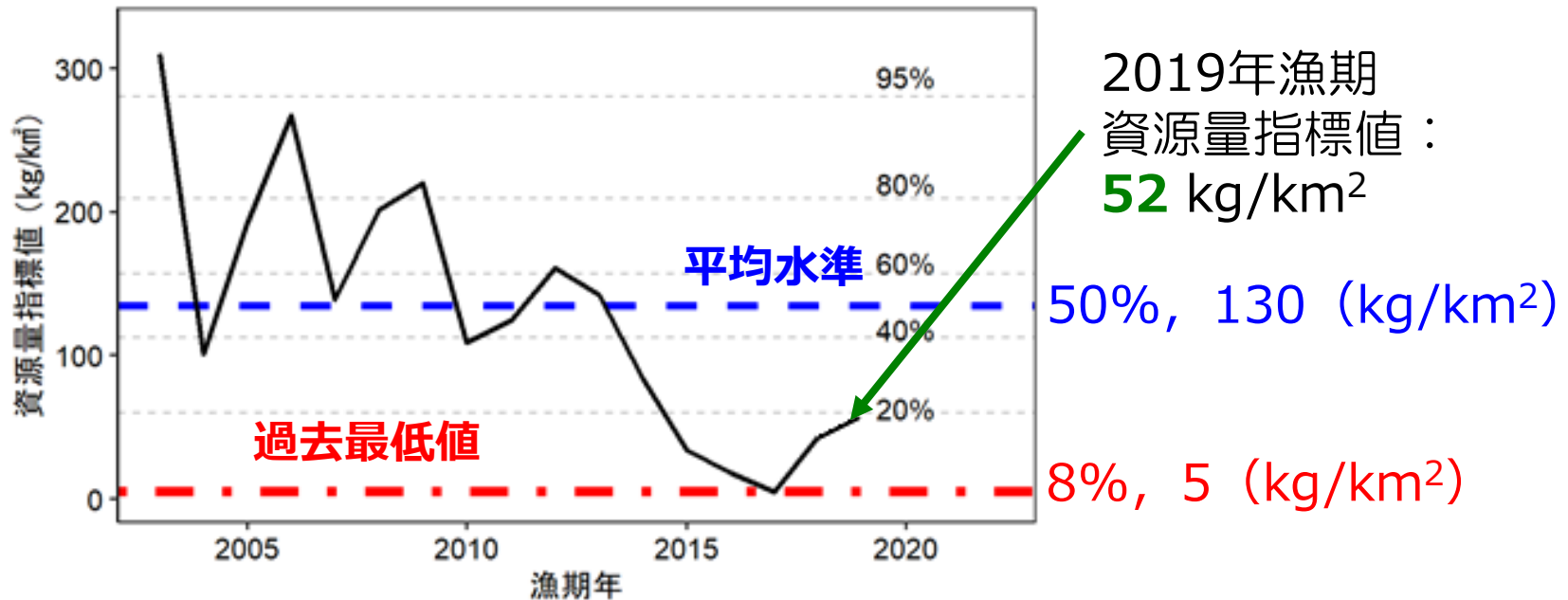
漁獲管理規則等の提案について

- 本資源はロシア水域と日本水域に連続的に跨って分布し、**両水域間で季節移動している可能性が高い跨り資源**である。
- ロシア水域での漁獲量は平均して数千トンを超えると推察される一方で、分布域の南端部分における日本漁船による直近5年漁期の漁獲量は237～905トンである。
- 日本水域における漁獲は、毎年変化するロシア水域等からの来遊量に左右されるとともに、スケトウダラなどの漁獲状況にも影響を受けており、日本水域で得られる情報からは資源全体への漁獲圧や資源量などを定量的に評価することは困難である。

「漁獲管理規則およびABC算定のための基本指針」に従い計算される**管理基準値案に基づく漁獲管理規則の提案は困難である。**

本資源では、来遊量の年変動に配慮しながら漁獲を管理することが重要である。

資源管理方針に関する検討のための代替値



- 資源量指標値を資源の来遊量の指標と考えて、その資源量指標値に累積正規分布を適用して算出された「平均水準」、「過去最低値」を評価の基準にすることを提案する。
- **平均水準**は、資源量指標値の50%水準で130 (kg/km²)
- **過去最低値**は、資源量指標値の8%水準で5 (kg/km²)
- 2019年漁期の資源量指標値は、**平均水準を下回るが、過去最低値は上回る。**